兵庫教育大学　研究紀要　第51巻　2017年９月　pp. 91－100

小学校のシニアスクールに見られる世代間交流に関する児童・高齢者・教師の意識

Consciousness of Children, Elderly People, and Teachers Concerning Intergenerational Exchange Conducted by Senior School in Elementary School

溝　邊　和　成*
MIZOBE Kazushige

本報告では、地域の高齢者を対象としたシニアスクールにおける世代間交流活動に対して、児童・高齢者・教師は、どのようにとらえているのかを明らかにすることを目的としている。調査対象は、北海道札幌市Ｋ区が設置しているＫ区民シニアスクール（札幌市立Ｓ小学校内設置）であった。児童・受講生・教師への質問紙調査ならびに交流活動に対する感想等の分析結果から、次の点が特徴として得られた。

シニアスクールでの受講生は、全学年の児童との交流活動に参加し、特に高学年との交流活動では、数少ない機会で様々な活動が工夫されていた。また、児童・受講生・教師が受け止める交流活動の効果等に違いが見られた。さらに受講生、児童ともに「科学実験」「料理」「ものづくり」など多くの科目、活動に対して「一緒に学ぶ」ことを強く期待していた点も明らかとなった。なお、学校と高齢者施設を併設することや一緒に学習する制度的導入等については、児童と受講生の間に意識の差が推察されるなど、互恵性を高める方策に様々な受け止めが見られた。

キーワード：シニアスクール、世代間交流、小学校
Key words：Senior School, Intergenerational exchange, elementary school

１　はじめに

近年、ライフステージに応じた「縦」の接続が一つの共通理念としてとらえられ、生涯学習社会の実現に向かおうとしている（例えば、文科省2013）。こうした点を背景に「学校」と「世代間交流」の関わりに関する研究は、今後ますます重要な位置に置かれると考えている。

2002年以降、幾つかの都道府県で初等・中等学校をベースとする「聴講生制度」が見られる。これらにかかわる研究として、溝邊ら（2015a）は、初めて導入された愛知県をはじめ、福岡県に見られる本制度における世代間交流の特徴を検討してきている。また、福岡県の中学校で導入された制度に対する生徒の意識なども明らかにしてきた（溝邊ら2015b）。他県（鳥取県、佐賀県、神奈川県、高知県）の中学校等で展開される聴講生制度に関する調査も手がけてきた（溝邊ら2016, 溝邊2017）。また、それらを整理した紹介もしてきている（溝邊，印刷中）。これらに一定共通している点は、学校および地域において、その受け入れが十分に行われつつ、世代間交流も図られる中で、聴講生の充実感が得られたことである。合わせて受け入れ側（学校、教師、生徒等）との関係性も良好であった。しかしながら、各年度での参加人数は、それほど多くない現状を抱えている。こうした中で、学校をベースに取り組まれる世代間交流として注目できる対象に、高齢者用の学校システムを展開するシニアスクールの制度がある。既存の学校に所属し、授業に参加する「聴講生」のシステムとは異なり、高齢者向けの学校を設立させ、高齢者の学びの場を開くものである。これまでに、筆者は、先の聴講生制度とともに岡山県の中学校を中心としたシニアスクールなど、事例的な紹介はしてきている[註1]。中学校に対する愛着心とシニアスクールの関与に関する研究（下山・金光2006）が関連する先行研究としてあるが、具体的な調査研究は、溝邊（投稿中）が見られる程度であり、今後の取り組みが求められるところである。

２　調査の目的および対象

本報告の調査目的は、地域の高齢者を対象とし、小学校設置型のシニアスクールでの世代間交流活動に対して、児童・高齢者・教員は、どのようにとらえているのかを明らかにすることである。特に、小学校の教育活動（各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間）における交流などの印象をはじめ、その可能性や期待について明らかにする。

調査対象は、北海道札幌市Ｋ区が設置しているＫ区民シニアスクールである[註2]。本スクールは、2006年８月より制度化され、小学校の空き教室を利用した講座制の

＊兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻授業実践開発コース　教授
平成29年４月26日受理

学校である。満60歳以上のＫ区民を対象に、20名を定員としている[註3]。新年度の申し込み期間（４月下旬まで）を経て５月下旬より12月下旬までの毎週水曜日に２講座ずつ授業が実施される（全50講座）。授業時間帯は、午前中（８時30分～12時）となっている。また２期制が導入され７月下旬から１ヶ月の夏休みが設けられている。開校場所は、札幌市立Ｓ小学校で、通常は小学校内で受講する。受講料として一定額を納めるが、講座内容によって別途材料費等の負担がある。活動内容は、スクールとして独自の講座が行われる一方で、全時間の半分程度に、小学生との世代間交流活動が設定されている。Ｓ小学校の授業をはじめ学校行事などに参加し、子どもと様々なかかわりが用意されている。その他、近隣の施設や工場等の見学など日帰りの研修旅行も実施されている。

3　調査方法

（１）対象者

①　2016年度シニアスクールの受講生（以下、シニア生）：　20名（男性８名、女性12名）。平均年齢68.0歳（最高年齢：81歳、最低年齢：61歳）

②　児童：札幌市立Ｓ小学校2016年度高学年児童115名（第５学年：54名、第６学年：61名）

③　教師：2016年度現在、札幌市立Ｓ小学校勤務する教員13名（男性５名、女性８名）

（２）資料

分析の対象とする資料の一つは、質問紙調査（2016年12月に実施）で得られたデータである。二つめは、スクールの授業実施後に寄せられたシニア生の感想（自由記述方式，2016年度分）とした。前者の調査項目は以下の通りである。

①　児童用

a. 交流活動の時期（学年）、交流形式（教えてもらう、教えてあげる、一緒に活動）、活動内容、感想

b. 交流活動に対する感想（シニア生に教えてもらうこと、教えてあげること、一緒に活動すること）

c. シニア生と一緒にしたいこと（小学校教科、趣味的な活動等）

d. シニア生ともっと一緒に活動できるためのアイデア

②　シニア生用

a. 学校園で教えたい・教えてもらいたい・一緒に活動したいこと（小学校教科、趣味的な活動等）

b. 交流活動の受け止め（児童に教えること）

③　教師用

a. 指導内容（年度、対象学年、概要、子どもの反応、成果と課題）

b. 交流への期待（児童、教師、シニア生）、活動の効果、活動の教育的意義、子どもとシニア生の互恵性

c. 互恵的関係を豊かにするアイデア（科目・活動面、交流運営面、児童・シニア生への指導面）

（３）分析方法

前節の項目①b, c, d および③b は、４件法でデータを収集・得点化し、平均値を算出後、統計処理を行う（Microsoft Excel for Mac（ver.14.5.1）を使用）。シニア生の交流に関する感想（自由記述）への質的分析は、GTA（グランデッド・セオリー・アプローチ）を参照し、カテゴリー分析を行った[註4]。

4　調査結果・考察

（１）カリキュラム

表１に示すように、2016年度のカリキュラム（http://www.satomicc.com/sinia/jyugyou.pdf）のなかで、児童との交流活動は、全学年を対象に行われ（年間13回）、特別支援学級を除いて各学年２回ずつ実施されていることが確認できる。

表１　シニアスクールのカリキュラム

月日	交流学年	月日	交流学年
6/01	交流1（1年）	9/14	交流8（1年）
6/15	交流2（6年）	9/21	交流9（4年）
6/22	交流3（2年）	9/28	交流10（4年）
6/29	交流4（5年）	10/05	交流11（6年）
7/13	交流5（3年）	10/19	交流12（2年）
8/31	交流6（5年）	12/14	交流13（ドングリ学級）
9/07	交流7（3年）		

（２）交流活動に対する受け止め

教師：2016年度の交流活動に対する教師（高学年担当教員）の受け止めは、表２に示す通りであった。表２に示すように、第５学年では、カルタ大会とインタビュー活動を行っていた。担当教員は、カルタ大会で手作りカルタの効果を認め、交流が図れたととらえている。第６学年では、シニア生と児童が共同でフォトフレームづくりに取り組んだ。担当教員は、共同作業への積極的取り組みを確認している。両学年で行ったインタビュー活動は、児童３～４名に１名のシニア生というグループ編成であったものの、積極的な取り組みであったとしていることがわかった。

児童：実施した活動に対する児童の意識は、表３のようにまとめられる。表３からもわかるように、第５学年で実施した活動として「カルタ」が44件を数えた。教科としては概ね「総合的な学習の時間」と把握し、「一緒に学ぶ」といった交流タイプだととらえていたと判断できる。「インタビュー」についてはシニア生から「教えてもらう」タイプの交流だと認識していたことがわかる。

表２　教員（平成28年度高学年担当者３名）の交流活動に関する受け止め（感想）１

学年	概　要	子どもの反応	成果と課題
5	**カルタ大会をしよう**：子どもたちが１人１枚ずつ作ったカルタを使って（グループになり）カルタ大会をしました。	自分たちで作ったカルタだったので張り切って参加していた。	手作りのものは思いが伝わりより楽しめた。
	オリジナルカルタで遊ぶ：子供達が自分で作ったカルタで一緒に遊んだ。シニア１人、子ども４人でグループを作り、カルタ遊びを行った。	熱中して行っていた。	交流を図れた。
	インタビュー活動：シニアさんたちの子どもの頃のことを聞き、パンフレットにまとめる。	自分の時代と違うこと、共通していることを知ることができたようで、楽しく活動していた。	交流を図れた。
6	**人とふれあい人から学ぼう**：シニアさんと一緒にフォトフレームを作成した。子どもたちにシニアさんと協力して作る段取りを準備して臨んだ。最後は一緒に写真を撮りフォトフレームに挟んだ。	共同して何かを一緒に作るという作業もとても楽しんで意欲的に取り組めていた。	子どもたちとシニアさんの数が「1対多」という状況なのでなかなか一緒に作ったという実感が持ちづらい子もいた。
	インタビュー活動：子ども3〜4人で一人のシニアさんにインタビュー活動を行った。インタビューした内容を後日、新聞にまとめシニアさんにプレゼントした。	インタビューの中で興味を持ったことなどについてさらに詳しく聞いたり、内容をより広げながらコミュニケーションをはかったりしながら時間いっぱい交流し続けていた。	インタビューをしながら、シニアさんからも様々なことを聞かれ、お互いを知ることができた（2回目の交流に向けて良い機会となった）。

表３　実施した活動（2016年度）に対する児童の意識
５年：54名、６年：56名

学年	活動内容		教科等		交流タイプ	
5年	カルタ	44	総合	42	B	1
			その他	2	C	43
	インタビュー	16	総合	14	A	11
			国語	1	C	4
			その他	1	AC	1
6年	フォトフレーム	49	総合	19	A	1
			総合・図工	1	B	6
			総合・その他	2	C	35
			図工・国語	1	BC	1
			図工	10	ABC	3
			その他	7		
	新聞づくり	15	総合	7	A	8
			総合・その他	1	C	5
			国語	1		
			その他	4		

ただし、表内の数値は件数を示す。またA,B,Cは、以下の通りである。
A：教えてもらう、B：教えてあげる、C：一緒に学ぶ

表４　教員から見た児童・シニア生のかかわり

項　目	平均値（SD）
期待（子ども）	3.18（.55）
期待（シニア生）	3.36（.64）
期待（双方）	3.55（.48）
確かな学び（子ども）	3.00（.60）
教育的意義	3.45（.50）
互恵的関係の成立	3.00（.60）

n＝11

第６学年「フォトフレーム」の作成は、「総合的な学習の時間」とともに造形的要素が大きく関わりことから図工として意識する児童もあったことがわかる。「教えてあげる（６件）」ととらえる児童もあったが、交流タイプとしては、その多くが「一緒に学ぶ」（35件）であった。またインタビュー（取材）から取り組んだ「新聞づくり」が活動内容として挙げられていた。その活動のタイプとしては、「一緒に学ぶ」要素もありながらも、半数は、「教えてもらう」活動だととらえていたことがわかる。

（３）児童とシニア生とのかかわり

教師：表４では、教師から見た児童とシニア生との関わりを示している。シニア生は交流をとても楽しみにしているととらえるとともに（平均値3.55）、教員自身も活動自体の教育的意義を感じており（3.45）、その交流も楽しみにしていることがわかる（3.36）。しかし、児童がこの交流活動が学びにつながっているという点や児童とシニア生との間に互恵的関係が成立する点は、他項目に比べやや数値が小さいことがわかった。

児童：児童のシニア生とのかかわりに対しては、表５に示す。「教えてもらう」「教えてあげる」「一緒に学ぶ」「一緒に遊ぶ」に対して、「うれしい」「楽しい」「わかる」の観点で意見を求めたところ、最も平均値が高かった項目は、「一緒に遊ぶ（楽しい）3.14」であった。続いて「教えてもらう（楽しい）3.07」「教えてもらう（よくわかる）3.00」「一緒に学ぶ（楽しい）2.96」「教えてあげる（よくわかってもらえる）2.96」となる。平均値が低いところでは、「放課後も一緒に遊ぶ」が最も低く（2.06）、比較的低い２.60台を示すのは、「仲良くなる自信2.60」「教えてあげる（うれしい）2.60」であった。

シニア生：シニア生は、「学校で教えること」につい

表５　児童のシニア生との関係について

項　目	児童の感情	平均値（SD）
教えてもらう	うれしい	2.83（.78）
	たのしい	3.07（.81）
	よくわかる	3.00（.79）
教えてあげる	うれしい	2.60（.86）
	たのしい	2.80（.91）
	よくわかってもらえる	2.96（.81）
一緒に学ぶ	うれしい	2.76（.84）
	たのしい	2.96（.85）
	よくわかる	2.63（.88）
一緒に遊ぶ	うれしい	2.82（.91）
	楽しい	3.14（.91）
	時間がほしい	2.68（1.00）
その他	放課後もいっしょに	2.09（.95）
	よりなかよくなりたい	2.86（.94）
	なかよくなる自信	2.60（1.05）

n＝109

表６　シニア生の交流活動の受け止め

項　目	平均値（SD）
児童に教えると嬉しい	2.88（.60）
児童に教えると楽しい	2.93（.57）
教えたい	2.33（.70）
教えることはよい	2.63（.70）
教える自信がある	2.19（.73）
教える機会がもっとあるとよい	2.44（.70）
児童は勉強がよくわかる	1.94（.66）

n＝17

ては、表６にまとめている。この表に見られるように、シニア生にとって「児童に教えること」は楽しかったり(2.93)、うれしかったりする（2.88)。しかし、「教えたい」、教える機会増加や教える自信については、平均値2.5を下回り、それほど支持が得られていないことがわかる。教えることによって児童がよくわかるかについても肯定的とはいえない（1.94)。

（４）交流活動（2016年度）に対するシニア生の感想

シニア生の交流活動（第５・６学年）に対する感想（参照：資料）を活動ごとに分類・分析した結果、表7.1～表7.4のようになった。第５学年初回の交流では、直接交流する前に行っている【授業参観】とその後に行っている【インタビュー】のカテゴリーにつながる感想が寄せられていた。前者では〈計算方法の違い(9)〉、〈教え方の違い(13)〉の《今と昔の違い》に着目していたことがわかる。後者では《思い出》として〈思い出話(2)(4)(11)(19)〉とともに、〈話が弾んだこと(1)〉や,

表7.1　交流活動への感想（第５学年６/29分）

カテゴリー	サブカテゴリー	ラベル（データ番号）
インタビュー	《かかわり》	〈話が弾んだこと(1)〉 〈緊張(16)〉 〈5年生への接し方(5)〉 〈子どもの反応(7)〉
	《思い出》	〈思い出話(2)(4)(11)(19)〉 〈思い出すよさ(12)〉
授業参観	《学習の普遍性》	〈学習の大切さ(6)〉
	《今と昔の違い》	〈計算方法の違い(9)〉 〈教え方の違い(13)〉
交流の効果	《交流の充実感》	〈交流のよさ（8)〉
	《児童の姿》	〈合唱に感動(15)〉 〈学習意欲(17)〉
交流の構成	《活動内容》	〈活動項目(3)(10)(18)〉 〈校外学習の話(14)〉

表7.2　交流活動への感想（第５学年６/29分）

カテゴリー	サブカテゴリー	ラベル（データ番号）
カルタ大会	《カルタのよさ》	〈自作・手作りカルタ(21)(25)(30)(36)〉
	《大会のよさ》	〈楽しいカルタ大会(24)(26)(28)(31)〉〈本気で取り組むカルタ大会(42)〉
	《児童の様子》	〈気配り(22)〉
交流効果	《交流の面白さ》	〈楽しい交流(45)〉〈真剣さが伝わる交流会(40)〉
	《児童の姿》	〈元気な印象(23)〉〈クラスの雰囲気(37)〉〈児童理解(38)(44)〉
	《コミュニケーション》	〈プレゼント(34)(41)〉〈シニア生の歌(35)(39)〉 〈歌う緊張感(27)〉〈楽器演奏(32)〉
授業参観	《授業内容》	〈学習内容の確認(20)〉〈学習内容への驚き(33)(43)〉
	《児童の考え》	〈児童の発想に感心(29)〉

〈緊張(16)〉などの《かかわり》がいくつか表れていた。また《児童の姿》では、児童の歌に感動したり、熱心に取り組む姿に注目したりしていた（〈合唱に感動(15)〉〈学習意欲(17)〉）。２回目の交流では、【カルタ大会】の内容が多く見られる。〈自作・手作りカルタ(21)(25)(30)(36)〉や〈楽しいカルタ大会(24)(26)(28)(31)〉などからもわかるように、《カルタのよさ》や《カルタ大会のよさ》をとらえている。また、【交流の効果】として〈プレゼント(34)(41)〉〈シニア生の歌(35)(39)〉〈楽器演奏(32)〉に加え、カルタ大会中の札が取れない者への〈気配り(22)〉の姿もとらえていた。第６学年では、〈対応のよいインタビュー(47)(55)(64)(65)〉〈工夫されたインタビュー(49)(61)〉など【インタビュー】の《質のよさ》に多くの感想が寄せられていた。また、【授業参観】では《授業内容》の〈工夫された授業(48)(54)(57)(60)〉などに関心が寄せられるとともに〈積極的な態度(63)〉といった《児童の姿》にも注目していた。交流活動全体での児童の姿をとらえる点も見られる（〈感心な児童(52)〉）。第２回目の交流活動

表7.3　交流活動への感想（第６学年６/15分）

カテゴリー	サブカテゴリー	ラベル（データ番号）
インタビュー	《質のよさ》	〈対応のよいインタビュー(47)(55)(64)(65)〉〈工夫されたインタビュー(49)(61)〉
	《多くの質問》	〈思い出す苦労(50)〉
交流効果	《コミュニケーション》	〈弾んだ会話(53)〉
	《児童の姿》	〈児童の行動(66)〉〈感心な児童(52)〉
授業参観	《授業内容》	〈工夫された授業(48)(54)(57)(60)〉〈苦労する授業(56)〉〈楽しい授業(58)〉〈授業内容への注文(59)〉
	《児童の姿》	〈児童の発想に感心(29)〉〈記憶のよさ(62)〉〈積極的な態度(63)〉
交流の構成	《内容と形式》	〈交流内容(46)(51)〉〈アドバイス(67)〉

表7.4　交流活動への感想（第６学年10/５分）

カテゴリー	サブカテゴリー	ラベル（データ番号）
フォトフレーム	《質のよさ》	〈センスの良さ(70)〉〈完成への期待(73)〉
	《制作サポート》	〈制作場所(69)〉〈児童による丁寧な指導(80)〉〈未完成（時間不足）(75)〉〈共同作業(78)〉
交流効果	《コミュニケーション》	〈共通理解不足(74)〉
授業参観	《授業内容》	〈印象的な授業(72)〉〈学習経験の想起(77)〉
	《指導法》	〈新しい授業(68)〉〈教え方の違い(76)〉
	《学習環境》	〈日付表記への疑問(79)〉
交流の構成	《内容と形式》	〈交流内容(71)〉

では、【フォトフレーム】でそのよさを受け止めたり（〈センスのよさ(70)〉〈完成への期待(73)〉）、〈児童による丁寧な指導(80)〉をとらえたりする一方で、《コミュニケーション》として〈共通理解不足(74)〉なども挙がっていた。

（５）交流活動への期待

シニア生：シニア生の交流活動への期待は、各教科では、表８に示すように、「教えてあげたい」が国語（１件）、算数（２件）、英語（１件）に、「教えてもらいたい」は、家庭科（２件）件となっている。「音楽」「道徳」以外の教科は全て「一緒に学びたい」にカウントされていた。さらに、教科内容と関連があったり、カルチャースクールで見られたりする内容に対して、どのような期待があるかについては、表９に示される通りであった。ただし、３件以上の支持を得た項目のみ示している。それによれば、科学実験（５件）を筆頭に、物づくりや楽器演奏、自然体験が４件を数える。交流のタイプで多いのは、「一緒に学ぶ」が14項目全てにわたってカウントされ、「強く一緒に学ぶ」を含めれば、合計数も36件となる。すなわち、どの活動も「一緒に学ぶ」ことを基本に交流することを希望していることがわかる。

児童：児童の期待は、表10のような結果となった。各項目の「A：教えてもらう」「B：教えてあげる」「C：一緒に学ぶ」の３つのなかで「A：教えてもらう」の平

表８　シニア生の期待する高学年との交流（教科等）

n＝15

	国	社	算	理	英	生	音	図	家	体	道	総	特
AA													
A									2				
BB													
B	1		2		1								
CC													
C	2	1	2	2	1	1		2		1		2	1

ただし、表内数値は人数を示す（複数回答あり、空欄は「なし」を表す。）
AA：とても教えてもらいたい　A：教えてもらいたい
BB：とても教えてあげたい　B：教えてあげたい
CC：とても一緒に学びたい　C：一緒に学びたい

表９　シニア生の期待する交流活動（高学年）とそのタイプ

	昔遊び外	おもちゃ	動物飼育	栽培園芸	科学実験	料理	ものづくり	絵画	パソコン	楽器演奏	朗読	短歌俳句	史跡巡り	自然体験
AA														
A							1		1	1				
BB				1										
B	1					1		1	1					
CC		1			1	1	2			1		1		1
C	2	2	3	2	4	1	1	2	1	2	3	2	3	3

ただし、表内数値は人数を示す（複数回答あり、空欄は「なし」を表す。）
AA：とても教えてもらいたい　A：教えてもらいたい
BB：とても教えてあげたい　B：教えてあげたい
CC：とても一緒に学びたい　C：一緒に学びたい

表10　シニア生が期待する活動への児童の期待

n＝110

	昔遊び外	おもちゃ	動物飼育	栽培園芸	合奏	科学実験	料理	物づくり	絵画	パソコン	朗読	短歌俳句	史跡巡り	自然体験
A：教えてもらう	2.90	2.43	2.57	2.50	2.46	2.79	3.00	2.81	2.40	1.99	2.12	2.54	2.69	2.74
B：教えてあげる	1.87	1.88	2.31	1.89	2.57	2.38	2.28	2.30	2.06	2.31	1.76	1.72	1.94	2.06
C：一緒に学ぶ	2.81	2.33	2.62	2.50	2.82	2.98	3.05	2.85	2.30	2.26	2.05	2.41	2.61	2.73

ただし、表内の数値は、平均値を示す。

表11　学校でより児童と高齢者が共に学ぶことができる方法

	平均値（SD）		t値	
	5・6年生（n=110）	シニア生（n=17）		
学校と高齢者施設を併設	2.57(1.00)	2.59(.97)	1.69	n.s.
専用バス（往復）を用意	2.65(1.10)	2.35(.84)	-.57	n.s.
授業を一緒に受ける制度を導入	2.67(1.01)	3.12(.58)	-1.34	+
休憩時、昼食一緒にできるように	3.09(1.00)	2.94(.64)	.14	n.s.
行事・イベントに参加できるように	3.06(.99)	3.24(.55)	-.24	n.s.

+：$.05<p<.10$

表12　教員の互恵性に関する感想

科目・活動内容面	交流運営面	児童・シニア生指導面
①　生活科や総合：遊びの交流、歌の交流、シニアさんが小学生の時の話など ②　総合＋国語、社会➡クロスカリキュラム ③　国語、社会、図工など ④　教科ではなく、共に活動できる内容 ⑤　生活：昔遊び（伝承）、社会：昔の暮らし、戦争体験、国語：読み聞かせ ⑥　生活科で昔遊び ⑦　総合的な学習の「人とのかかわり」の学習の中で、国語の「話すこと聞くこと」の学習の中で ⑧　生活科（昔遊び）算数（九九先生）	①　定期的に複数回接する機会があればいいなと思います。 ②　普段から身近に両者が生活するような環境を整えること。例えば、同じフロアで同じ活動時間で学校生活を送る工夫はどうだろうか。 ③　今年度なみで良いと思う。２回２時間、夏と秋くらい。 ④　（１年生であれば）学校に慣れてくる夏以降に２ー３回あると、シニアの方との距離が近くなるかと思います。 ⑤　準備等を考えると年１ー２回が良いと思います。 ⑥　もっと短く、複数回に渡って交流すると互いに	①　交流や活動の目的や目標を明確にすること ②　交流には心理的距離を縮めるための時間（回数）が必要。今のまま、年１から２回程度の交流では、深まらないのではないかと思う。 ③　（児童向け）学習していることを発表する、練習していることを見てもらうアドバイスをもらうなど活躍場面が考えられる。

均値が最も高い項目は、「昔遊び（外）（2.90）」「おもちゃ（2.43）」「絵画（2.40）」「朗読（2.12）」「短歌・俳句（2.54）」「史跡巡り（2.69）」「自然体験（2.74）」であった。続いてBが最も高い平均値を示す項目は、「パソコン（2.31）」のみであった。「C：一緒に学ぶ」の平均値が最も高い項目は、「動物飼育（2.62）」「合奏（2.82）」「科学実験（2.98）」「料理（3.05）」「ものづくり（2.85）」の５項目であった。また、14項目中、「一緒に学ぶ」の平均値が最も高かったのは、「料理」（3.05）であった。「科学実験（2.98）」「ものづくり（2.85）」「昔遊び（外）（2.81）」が、それに続く。

（６）より共に学ぶことができる工夫

児童・シニア生：学校で児童とシニア生が一緒に学ぶことができるアイデア４項目対して、意識調査（シニア生および第５・６学年児童）の結果は、表11となった。

「学校と高齢者施設を併設する」項目については、児童、シニア生いずれも平均値が2.5点台にとどまり、有意差も認められなかった（$t(125)=1.69$n.s.）。それほど支持が得られていないことがわかる。「専用バスの用意」に関しても、児童、シニア生間に有意差はなく（t（125）＝－.57n.s.）、ジニア生の平均値（2.35）は、４項目の中で最も低い値となったことから、必ずしも肯定的とは言えない。「授業を一緒に受けることができる制度の導入」に関しては、シニア生の平均値は、3.0を超えているが、児童は2.6点台であった。検定の結果では両者間に有意傾向が見られ（$t(125)=-1.34$ $p<.10$）、それぞれの意識の違いが推測される。「行事・イベントに参加できるようにする」の項目では、最も平均値が高く双方とも3.0を超え、肯定的にとらえていると判断できる。

教師：互恵性（Newman 1997）をより高めるための工夫として、教師のアイデアは表12にまとめられる。

「科目・活動内容面」では、９件中５件に「生活科」または「総合」が見られる。「社会科」（４件）「国語科」（３件）と続く。その他の教科としては「算数科」「図工科」がそれぞれ１件であった。総合と他教科を合わせるクロスカリキュラムや教科を問わない意見も見られた。

「交流運営面」では、回数について現在のままを肯定

する意見（③⑤）と増やして充実させる意見（①④）に分かれた。「短い時間を数多く」という考え（⑥）もあった。回数以外では、「両者（シニア生と児童）が同じフロアで同じ活動時間で学校生活を送る」といった環境設定の工夫が提案されていた。

指導面では、目標の明確化（①）、回数を増やす（②）、学習発表や練習にかかわる（③）の３点が示されていた。

５　まとめと今後の課題

本報告で明らかになった点は、次の５点に集約できる。１点目は、充実した交流活動である。シニアスクールのシニア生は、その期間内で全学年の児童との交流活動に参加しており、特に高学年の交流活動では、児童が昔のくらしなどを知るためにシニア生へ行うインタビューとともに、ものづくりやゲームが取り組まれていた。また、歌や楽器演奏、プレゼントに加え、交流前の授業参観も設定し、数少ない機会で様々なタイプの活動が工夫されていた。そうした成果は表２、表３及び表7.1～表7.4などから窺われる。

２点目は、交流活動の受け止めの違いが見られた点である。表４の結果から、交流活動に対して、教師は互恵的関係が成立しているとしていたが、児童は、「一緒に遊ぶこと」が「楽しい」としながら、「放課後も遊ぶ」ことには消極的、「仲良くなる自信」もそれほど強くない（表５）。またシニア生にとっては、交流活動で「教える」ことは、楽しかったりするが、「教える」ことに自信がなかったり、児童の勉強の手助けになっているかどうかが不安であることがわかった（表６）。こうした関係の受け止めに緩やかな差異が生じている点は、様々な関係性が包摂していることへの確認ともいえる。

３点目として、シニア生、児童ともに多くの科目、活動に対して「一緒に学ぶ」ことを期待している点が挙げられる。表８、表９、表10などから、「科学実験」「料理」「ものづくり」「合奏」「昔遊び（外）」を一緒に学ぶ希望も見られ、具体的な活動の内容決定に関して示唆的結果を得たととらえられる。

４点目は、互恵性（Reciprocity）を高める方策として様々な意見が得られた点である。世代間交流活動では、互恵性は重要である（Newman, 1997）。それは、一方的な損得関係からの脱却であり、より対等な関係の構築といえる。表11が示すように、そのアイデアとして「行事・イベントに参加できるようにする」点は、児童、シニア生に共通して肯定的支持が認められた。しかし「学校と高齢者施設」の併設に対しては、双方ともそれほど高い支持が得られず、「一緒に学習することの制度的導入」についても児童、シニア生に意識のズレが予想された。「専用バスの用意」はシニア生にとって肯定的とは言えなかった。また表12の「接する回数を増やす」という意見に対しても賛否が見られた。今後の検討が求められるところである。

以上の点を受けて、今後も詳細な事例的検討を要すると考える。小学校段階とともに校種の異なる中学校を対象にしたシニアスクールの調査も発展的研究として想定している。そこでは、特に本報告で取り上げられなかったシニアスクール独自のカリキュラム内容と中学校で実施されているカリキュラム、さらには、放課後の部活動へのかかわり等を中心に検討する計画である。

付　記

JSPS KAKENHI Grant Number［26285176］

謝　辞

本調査を推進するにあたって、北海道札幌市立Ｋ区市民部地域振興課職員の皆様をはじめ、札幌市立Ｓ小学校の教職員、児童の皆様、更には2016年度シニアスクールの受講生の皆様の多大なるご協力を頂きました。心よりお礼申し上げます。

註

註１：以下の学会・研究会等での発表が該当する。

Kazushige Mizobe（2015）, The pilot programs; “auditor system” and “senior school” in elementary /junior high school, Japan, Generations United 18th Global International Conference

Kazushige Mizobe, Hirotsugu Tazume, Masako Yoshizu, Makoto Yano（2015）, A research for the Reciprocity of School-Based Intergenerational Programes in Japan, Generations United 18th Global International Conference

Kazushige Mizobe, Hirotsugu Tazume, Masako Yoshizu, Makoto Yano（2016）, Features for the Auditor System in Elementary and Junior High Schools in Fukuoka, Japan, Fukuoka Active Aging Conference in Asia Pacific 2016（Fukuoka）

註２：http://www.city.sapporo.jp/kiyota/chiiki-shinko/shinia/shinia.html

http://hiromaaru.org/archives/6300

註３：定員を超える申込みがあった場合は、初めての受講する区民が優先され、抽選が行われる。また、1998年より毎年実施されているＫ区高齢者教室「ふれあい学園」との同時受講はできないことになっている。

註４：データ分析については、GTA（グランデッド・セオリー・アプローチ）の手続きをベースに分類・カテゴリー化を行った（資料）。関連書として以下の文献を参照した。

戈木クレイグヒル滋子編著（2014）グランデッド・セオリー・アプローチ　分析ワークブック、日本看護協会出版会、戈木クレイグヒル滋子編著（2013）質的研究法ゼミナール第２版：グランデッド・セオリー・アプローチを学ぶ、医学書院、木下康仁（1999）グラウンデッド・セオリー・アプローチ －質的実証研究の再生、弘文堂、木下康仁（2003）グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 －質的研究への誘い、弘文堂

引用・参考文献及び発表

溝邊和成・田爪宏二・吉津晶子・矢野真（2015a）小中学校の聴講生制度に見られる世代間交流，日本世代間交流学会誌，Vol.5 No.1，47-55

溝邊和成・田爪宏二・吉津晶子・矢野真（2015b）聴講生制度導入に対する中学校生徒の意識，日本世代間交流学会第６回全国大会 2015.10

溝邊和成・田爪宏二・吉津晶子・矢野真（2016）中学校聴講生制度の特徴と高齢者の参加意識 －資料ならびにインタビュー調査をもとに－，日本世代間交流学会第７回全国大会 2016.10

溝邊和成・田爪宏二・吉津晶子・矢野真（2017）学校支援活動参加者を対象とした聴講生制度における世代間交流 －土佐町学校応援団「生涯楽習学校」の分析と小・中学生の意識調査をもとに－，日本世代間交流学会誌，Vol.6 No.1，49-58

溝邊和成（印刷中）小・中学校の空き教室を活用したシニアスクールの世代間交流，日本世代間交流学会誌，Vol.7 No.1

文部科学省（2015）教育基本計画，
http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/__icsFiles/afieldfile/2013/06/14/1336379_02_1.pdf

Newman, S. (1997), History and Evolution of Intergenerational Programs, Newman, S., et al. *Intergenerational Programs: Past, Present, and Future,* Taylor, & Francis, pp.18-19

下山育子・金光義弘（2006），中学生の学校に対する愛着心とシニアスクールへの関与度との関連性：学校を拠点としたコミュニティスクールの場合，日本教育心理学会総会論文集（48），588.

資料　2016年度　児童（第５、６学年）との交流に関する感想（シニア生）

学年（日付）	シニア生	No.	記述内容	ラベル名
5 (6/29)	A	1	ものおじせず、お話がはずんで楽しかった。	話が弾んだこと
		2	昔のことを思い出しながら話しました。	思い出話
	B	3	授業参観 ・宿泊研修の発表会・歌のプレゼント	活動項目
		4	小学５年生の時代のインタビュー	思い出話
	C	5	孫が5年生なので同じように接しました。	５年生への接し方
		6	授業の小数点の割り算はまさに実生活で使う事だし、この時期が大切なんだと実感させられました。	学習の大切さ
		7	インタビューで今は当たり前のアニメ、ゲームが無い事にビックリしていましたよ。	児童の反応
		8	交流できて良かったです。	交流のよさ
	D	9	算数の計算方法、昔とはちがったように思いました。	計算方法の違い
	E	10	前半は授業参観、算数の授業風景を参観。後半は滝野公園への一泊郊外学習の報告と、インタビュー。	活動項目
	F	11	子供のころのインタビューでした。	思い出話
	G	12	インタビュー、昔の遊び、戦争の事、歌の事、思い出しながら話しましたが、忘れた事が多々ありました。でも、思い出すことは良い事ですね。もっと話したい事がありました。	思い出すよさ
	H	13	授業参観(算数)掛け算、割り算、小数点→私達の時代とは教え方がずい分違うと思いました。先生の大変さ、子供の努力を感じました。	教え方の違い
		14	滝野に行った時の子供達の発表...楽しく聞きました。	校外学習の話
		15	歌(皆で合唱)...子供達の歌を聞くたび感激します。	合唱に感動
		16	インタビューを受ける...昔の事を聞かれるのですが忘れている事が多くドキドキします。	緊張
	I	17	インタビューの内容も的確で昭和の時代を知ろうという意欲が出ていました。	学習意欲
	J	18	滝野自然公園1泊宿泊学習体験談。	活動項目
		19	子供(同年代の)頃のインタビューを受ける。	思い出話
5 (8/31)	K	20	5 年生で人が生まれる事をやっているのですね。教科書があるのも良いですね。	学習内容の確認
		21	自分たちでカルタを作る、おもしろいですね。	自作カルタ
		22	取れないもので、とても気を使ってくれる心がうれしいですね。	気配り
		23	元気でとても良かったです。	元気な印象
	L	24	カルタ取り、しばらくぶりでとても楽しかったです。	楽しいカルタ大会
	M	25	カルタが上手に出来ていました。	自作カルタ
		26	楽しかったです。	楽しいカルタ大会
		27	歌は久しぶりに前で歌ったので緊張しました。	歌う緊張感
	N	28	5 年生の手作りカルタでの男の子達のカルタ取り楽しかったです。	楽しいカルタ大会
		29	授業参観での季語、生徒の発想等がとてもおもしろく感心しました。	児童の発想に感心
	O	30	カルタ大会、手作りで絵がとても上手でした。	自作カルタ
	P	31	児童手製の「カルタ」でカルタ大会、楽しかった。久しぶりに真剣になる場面もあった。	楽しいカルタ大会
		32	リコーダー演奏はよかった。みんなの頑張りが目にみえた。	楽器演奏
		33	授業参観で「理科」の内容は 「人の誕生」で教科書にしても、先生の説明にしても、私の時代には考えられない衝撃でした。	学習内容への驚き
	Q	34	授業参観、カルタ大会(5年生が作ったもの)、インタビューされたものをまとめて写真付きのものを贈呈されました。	プレゼント
		35	シニアのみんなで「ゆうやけこやけ」を歌いました。	シニア生の歌
	R	36	手作りカルタに感動しました。	手作りカルタ
		37	5年 1 組、2 組のクラスに入った時、良い空気を感じました。	クラスの雰囲気
	S	38	小学 5 年生は、毎日が成長している時期だと思う。自分達もそういう時があった。	児童理解
		39	カルタ取り、私達は「夕焼け小焼け」と、「夕焼け小焼け」の替え歌で、お返しをした。	シニア生の歌
	T	40	子どもたちが作ったカルタを使ってのカルタ取り。授業参観、リコーダー演奏、どれも真剣さが伝わり、さすが5年生でした。	真剣さが伝わる交流会
	U	41	前回のアンケート結果を大きいファイルにしてくれて、それをいただきました。嬉しかったです。	プレゼント
	V	42	カルタ大会は、思わず本気モードになってしまいました。	本気で取り組むカルタ大会
	W	43	授業内容には驚いた。	学習内容への驚き
		44	歌のプレゼント、僅か一回で覚えてしまう能力的順応性にも、ただ、ただ、感心するのみ。	児童理解
	X	45	楽しいふれあいでした。	楽しい交流
6 (6/15)	AA	46	授業見学と、小学生からの質問とゲームを実施。	交流内容
	BB	47	最初は4人の生徒からのインタビューでしたが、後半はお互い質問のやり取りを楽しくやらせて頂きました。	対応のよいインタビュー
	CC	48	両組とも国語でしたが、同じ所を勉強しているのでしょうか?教え方が違うのですね。百人一首、和歌ですね。 教科に取り入れてるのがいいですね。	工夫された授業
		49	インタビューの交流は質問が沢山用意してありすごく考えたんだろうと思いました。	工夫されたインタビュー
	DD	50	6 年生にいっぱいインタビューを受けた。昔の記憶を思い出すのが大変でした。	思い出す苦労
	EE	51	授業参観、インタビューを受けてからゲームをしました。	交流内容
	FF	52	子供達の積極的な様子に授業参観、班に分かれて質問を受けどちらとも感心する事が多くありました。	感心な児童
	GG	53	とても会話がはずんでたのしかった。	弾んだ会話
		54	授業もよく工夫されていると思いました。	工夫された授業
	HH	55	子供たちが楽しそうにインタビューをしてくれて良かったです。話しが途切れない様に気を使ってくれました。	対応のよいインタビュー
		56	授業は大変だなと思いました。私が今、生徒だったら苦労しているだろうと思います。	苦労する授業
		57	百人一首を使った授業も変わってて良かったです。	工夫された授業

	II	58	授業参観、百人一首とても懐かしく、思わず口ずさみました。	楽しい授業
		59	読み人(作者)も言って欲しかったな.....。	授業内容への注文
		60	昔と違って一方的な教え方でなく意見交換が活発で良かった。	工夫された授業
	JJ	61	インタビューで受けた質問が前もってよく管理されていた。ゲームで 6 年生、シニアのインタビューに対する意見がしっかりと聞くことができた。	工夫されたインタビュー
	KK	62	授業参観で一クラス目は百人一首のグループに別れて各々のグループ内での対抗、先生の読む句から生徒が札を取る、前句を読んでる途中でも見事に取る生徒もいて驚く	記憶のよさ
		63	もう一クラスは生徒が積極的に発言し、授業を組み立てている事に感心する。	積極的な態度
		64	交流会ではインタビューを受け自己紹介するが質問項目をきちんと整理され、更にこちらの答えを聞いたうえでの再質問の対応は素晴らしいものがあった。	対応のよいインタビュー
	LL	65	インタビュー形式で4人が聞きたいことをメモっていてとても答え易かった。	対応のよいインタビュー
	MM	66	現代っ子で皆何事もなくテキパキとしていた。	児童の行動
	NN	67	前々のアンケートにも書きましたが、交流授業のときは椅子は使用しない方が良いと思います。※目線が違うし話し声も聞き取りにくいです。	アドバイス
6	OO	68	算数の授業参観。今の授業は(→グループ学習)昔と違って(→ 一方的)考える授業。	新しい授業
(10/5)	PP	69	ランチルームでのフォトフレーム製作。	フォトフレーム制作場所
	QQ	70	フォトフレーム作成。センスが良かったですよ!	センスの良さ
	RR	71	授業参観(算数)。子供達と写真入れの工作のお手伝い。	交流内容
	SS	72	授業参観 とても難しいですが先生が皆が分かるまでしているのは印象に残りました。	印象的な授業
	TT	73	フォトフレーム作り 子供達が一生懸命考えていて、出来上がるのが楽しみです。	完成への期待
	UU	74	何をどう作るのか、初めは分かりませんでしたが、シニアさんにも分担させなければという考えなのでしょうね。これこれこうで、こうしたいので、シニアさんにはこれを作ってください、と言ってくだされば良かったのに。でも6年生が考えたのでしょうね。	共通理解の不足
	VV	75	時間が足りなくて完成出来ませんでした。	未完成（時間不足）
	WW	76	6年生の勉強を見学したが、時代を感じる。理解の出来ない子には、もう1人の先生が教えているようでした。	教え方の違い
	XX	77	授業参観(算数)、教室に入り黒板を見た時、今日の日付が手書きされていたが、「神奈月五日(水)」と書かれていた。児童が書いたと思うが、「神無月」と書くところ「奈」にしたのは、何か意味があるのか、それとも単なる間違いか。	日付表記への疑問
		78	フォトフレーム作りを共同作業する。仕上げは児童だけですることになる。	共同作業
	YY	79	1時間目か算数の授業参観でした。私達が中学生になってから習ったような事を学習していました。	学習経験の想起
		80	2時間目は工作です。フォトフレームの作成でした。作り方を6年生の子供達が、丁寧に教えてくれました。	児童による丁寧な指導